

次の文を読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

皆人の「からだ」ばかりの寺参り 「こころ」は宿にかせぎをぞする (為愚痴物語卷六ノ一二)

生きた人間を「からだ」と「こころ」で対立させる二元論的把握は、視野を転じて、言語記号の成り立ちという問題に対して*も、アナロジカルに適用することができる。

言語記号は、一定の音声形式と意味とから成り立っている。人間の「からだ」が「こころ」の器であるなら、音声形式も、また、意味の器にはかならない。「からだ」に「こころ」の宿っているものが生きた「身」であるなら、音声形式に意味の宿っているものが、すなわち「語」にはかならない。

語の成り立ちを「身」との対比において把握する観点から、とりわけ注目される問題は、「語」の意味に対応する概念として、「身」の方に、「こころ」という言葉が見出されることである。わが国で、「意味」という言葉が、いつごろから使用されるようになったのかは判然としない。*ヘボンの辞書には収められているが、日葡辞書など中世の辞書には見当らないようである。しかし、「意味」という漢語を知らない時代にも、「意味」を含意する言葉は存在した。それが、「こころ」という和語であったことは、あらためて紹介するまでもない。のみならず、この事実は、たとえ偶然であるかもしれないにせよ、語を人間とのアナロジで捉える観点から導かれた、「意味」と「こころ」の対応関係にいみじくも合致している。

一般に、意味論は、意味を客観的認識の対象として、当の言語主体から切り離しすぎたうらみがある。いま、語の意味を、「こころ」という和語によって認識しなおしてみると、⁽¹⁾語の意味と言語主体の心的活動は、確実に一本のキイ・ワードで架橋されることになるであろう。意味論にとって、これは、すこぶる重要な示唆だとはいえないであろうか。

*

共鳴、親愛、納得、熱狂、うれしさ、驚嘆、ありがたさ、勇気、救ひ、融和、同類、不思議などと、いろいろの言葉を案じてみましたけれど、どれも皆、気にいりません。重ねて、語彙の貧弱を、くるしく思ひます。(太宰治『風の便り』)

事物は、それを名づける言葉が見出されない限り、存在しないに等しい。言語主体は、なにか明晰な^{めいせき}かたちで認識したいものがあるとき、現在の自分の「こころ」に過不足なく適合する「こころ」を具有した言葉をさがし求める。そうして、該当する言葉がつかまえないとき、自分の「語彙の貧弱を、くるしく思^う」う。だが、語彙の多寡など、所詮は程度の差である。いくら語彙の豊富な人間でも、自分の「こころ」をぴたりと表現できない苦しみから完全に自由であることはできない。人間の世界は、言葉によつて縦横に細分されてはいるものの、語の配分は、決してわれわれの経験世界に密着した精密度で行われているわけではない。⁽²⁾もつとも客観的に見える自然界ですら、実際は、なんら客観的に分割されていないというのが、言葉の世界である。以前、「語彙の構造と思考の形態」と題する小論の中で、次のように述べたことがある。「スペクトルにかけられた色彩を、現代日本語は七色で表わす。しかし英語では六色であり、^{*}ロヂシヤの一言語では三色、リベリアの一言語では二色にしか分けない。言語によつて、色彩の目盛りの切り方が相違しているのである。これが直ちに言語の構造の問題と結びついていることは、言語構造の概念を説明するための雛型^{ひながた}として、スペクトルの例が好んで採りあげられることを想起すれば十分である。言語が構造であること、構造とは分節的統一にはかならないことを、ここからわれわれは容易に認めることができる。思考活動は、この目盛りの切り方、言語の構造性に依じて営まれる。同じ虹に対しても、人はその属する言語の構造という既成の論拠の上においてのみ、色合を認知しうるのである。スペクトル中の色帯の数を、ミクロン単位で数えるならば、三七五種の多くにのぼると言われる。それを何色かに分割するということは、無限の連続である外界を、いくつかの類概念に区切り、そこにおける固定した中心、思想の焦点としての名称をもつて配置することである。曖昧で不確かで変動しやすい人間の知覚は、名称によつて新しい形をとり始める。客観的世界ははじめて整理せられ、一定の秩序と形態を与えられる。朦朧^{もうろう}として不分明な個人の感情、捉えがたい心理の内面も、すべて名称による以外には、自己を客観化し明確化するすべを持たない。スタンダールの『赤と黒』に、ジュリアンとの媾^{あひびき}のあとで、幸福の陶醉に耽^{ふけ}っていたその夜のド・レーナル夫人が、突然、自分の行為の「姦通」^{アデルテール}という怖ろしい言葉に宛てはまるのに気づいて愕然^{がくぜん}とする場面がある。言語以前の無意識の状態における個人的感情が、判然たる姿をとつてその性格を客観的に現示するものは名称であることを、これは端的に物語っている。考えて

みれば、これほど危険千万なことではない。言葉によって、カオスがコスモスに転化することは事実だとしても、そのとき、名づけられたものは、他のあらゆる属性を切り捨てられ、⁽³⁾無垢の純潔性を失ってしまう。

ベンジャミン・リー・ウォーフも言うように、言語とは、それ自体、話者の知覚に指向を与える一つの様式であり、言語は、話者にとって、経験を意味のある範疇^{はんちゆう}に分析するための習慣的な様式を準備するものである。言語が押しつける恣意的な分類法、その上に立つ一定数の限られた言葉で、無限の連続性を帯びている内外的世界を名づけること、それは、言語主体に指示して彼を特定のチャンネルへと追いかむこと、外部から一つの決定を強制することではないか。もしあなたが、或る人の行為や心理を一つの言葉で名づけるならば、あなたは、その人に、その人の行為や心理を啓示することになる。その人は、名づけられた言葉を手がかりに、あらためて自分をかえりみるだろう。

「泣きぬれた天使」という往年のフランス映画にも、そうした場面があった。ジュヌヴィエーヴは、盲目の彫刻家に対する友情とも憐愍^{れんぴん}ともつかない漠然たる心情を、他人から「愛^{アムール}」という言葉で啓示されたとき、自分のすべてが決定されたことを知った。今度は、「愛」という言葉が、彼女の「ところ」を鍛えあげてゆく。或いは、人間の「ところ」が、言葉につかみとられて、否応なしに連行されてゆくのだといってもいい。「愛」とか「嫉妬」とか「憎悪」とかいう言葉が現れると、⁽⁴⁾その言葉とともに、愛や嫉妬や憎悪が結晶してくる。もやもやした感情を、「愛」でとらえるか、「嫉妬」でとらえるか、「憎悪」でとらえるか、結びつき次第で、彼の運命は大きく違ってくるであろう。彼は「愛」をそだてることに成功するかもしれない。「嫉妬」に懊惱^{おうのう}する男になるかもしれない。「憎悪」のあまり、女を殺す大罪を犯すに至るかもしれない。

*

人間の「ところ」と言葉の「ところ」との間には、相互にはたらきかける二つの力がある。一つは、言葉の「ところ」が人間の「ところ」に作用する力であったが、もう一つは、人間の「ところ」が、言葉の「ところ」に作用して、それを変えてゆく力である。言葉が、人間世界の細目に対してごく大まかにしか配置されていないものである以上、われわれは、自分の「ところ」を、適切な言葉によって表現できないという不幸を宿命的に負わされている。どうしても、「ところ」を託すべき言葉がなければ、

穴埋めに、新語を創造し、古語を復活し、外国語を借用するという方法も講ぜられる。

人間は、絶えず、その人、その時代に固有の「ところ」を持った言葉をさがし求めているものだ。新しい「ところ」は、それを関連づけることのできるような「ところ」を持った言葉を見つけて、その中に押しこまれる。あとから押しこまれた方の「ところ」が、人々から強力に支持されつづけられ、新しい「ところ」は、古い「ところ」を押しつけて、新規にその主人ともなりうる。言葉の「ところ」を変える力は、すなわち、人間の「ところ」であって、言葉の「ところ」が、人間から独立して、勝手に変わるのではない。言葉の意味変化が、人間の「ところ」の変化を前提とする以上、人間の「ところ」の側から、言葉の「ところ」が追究されなければならないのは当然であろう。⁽⁵⁾ 意味論は、人間の「ところ」と言葉の「ところ」の相互関係を究明する「ところ」の学とならない限り、人間の学としての「意味」を持ちえないといつても過言ではない。

(佐竹昭広「意味変化について」より。一部省略)

注(*)

アナロジカル＝analogical「類推による、類推的な」の意。

ヘボンの辞書＝ジェームス・カーティス・ヘボンによって幕末に編纂された、英語による日本語の辞書。

日葡辞書＝ポルトガル語による日本語の辞書。一六〇三年から一六〇四年にかけてイエズス会によって長崎で出版された。

ロデシヤ＝アフリカ大陸南部の地域名称。現在のザンビアとジンバブエを合わせた地域にあたり、二〇以上の言語が話されている。同じく西アフリカのリベリア共和国も三〇近い言語が話されている多言語国家。

問一 傍線部(1)はどのようなことか、説明せよ。

問二 傍線部(2)はどのようなことか、説明せよ。

問三 傍線部(3)はどのようなことか、説明せよ。

問四 傍線部(4)はどのようなことか、説明せよ。

問五 傍線部(5)のように筆者が考えるのはなぜか、説明せよ。

次の文を読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

私の咳は風邪の咳と違って、気管の奥まで届かない。気管の奥まで届いて、そこにたまっている痰をゼイゼイと震わせる咳には、一種独特な快感があるものだ。熱っぽい躰からだの内部に力づくで風穴をあけようとしているような、もうひと息で風が通って躰じゅうが爽やかになりそうな、カタルシスの予感がつきまとう。私の咳ははじめのひと声ふた声はともかく、三声目からはもう空咳なのだ。内のものが外へ押し出るとか、外のものが中へ流れこむだとか、そういった感じはなくて、通路そのものがいたずらにケイレンを起こす。気管が身勝手に神経的な苛立ちいらだをぶちまけ、こちこちになるまで力んで、われとわが身をいためつける。私はこらえられるだけこらえて、それから「俺はいつかこれで死ぬぞ、これで死ぬぞ」とやくざな喉と気管をなじりながら、手ばなしで咳きこみはじめる。咳の音がコンコンなどというしおらしさを通り越して、キーンキーンとどこか金属的な響きを帯び出すと、左の胸の奥がふと異な感じになりかかることがあるけれど、私の気持はかえって平靜になって、「心臓が止まるとは、こういう感じか」などと思ったりする。どうかすると、私は身も世もあらず咳きこみながら、咳きこんでいる自分の姿を冷やかに眺めたりする。肩に力をこめ、背を丸め、胸板を震わせている姿が、どうにも子供っぽいのだ……。

ベランダに出ると咳が出るのは、躰が急に冷やされるせいだろうが、それよりも先に、夜気の中に立った不節制な躰の、いわば戸惑いといったものが働いているようだ。いくら都会とはいえ夜半をまわれればいくらか清浄になる空気に触れて、タバコの煙と坐業ざごうにふやけた躰が自分の内側の腐敗の気を嗅ぎ取り、うしろめたく感じるのだ。あるいは、それは出つけぬ人前に出て話をしようとする人間の神経質な咳ばらいに似てるかもしれない。曖昧に喉から洩もれた咳が静まりかえった夜半の棟と棟の間で意外に高く響き、耳障りな音で人の眠りを乱してしまったような恥しさが、また咳を誘い出す。はじめは照れかくしの咳ばらい程度でも、ちよっと切羽つまった響きがその中に入り混ると、たちまち自己暗示にかかって、ほんとうに身も世もあらず咳きこみ出す。

ある夜、私はベランダの手すりにもたれて、誰もいない中庭の遊園地にむかって手ばなしで咳きこんでいた。昼間は子供たちの声に賑にぎわうブランコや滑り台や砂場が街燈の光の中で静まりかえって、私の咳を無表情に受け止めていた。そのうちに、

私が咳くたびに、向かいの棟の壁いっぱいには洞ろな音が走るのに、私は気づきはじめた。内側から胸を揺さぶられながら耳を澄ますと、たしかに私の気管が子供じみた悲鳴を上げるたびに、百何世帯かの暮しをおさめて夜の中に白々と立つ大きなコンクリートの箱が、ちょうど屋上から地階にかけて水しぶきを勢いよく叩きつけられるみたいに、ピシャッピシャッと無機的な音を立てている。私の声が向かいの壁にひろがって解してはいるらしかった。私は急に空恐ろしくなつて手を口に押し当てた。掌に抑えこまれて、咳は私の胸の奥にゴボゴボともった。その音はもちろん向かいの壁で繰り返されたりはしなかった。

向かいの棟の壁に大きく、頭が屋上に届きそうに映った人影を、私は一度ベランダから見たことがある。夢でも錯覚でもない。光の加減でそんな事があるのだ。その影はレインコートを着て歩いてた。足が四階ぐらゐにあつて、頭が十階あたりにかかっていた。そして黄色い光の中に濃く浮き出て、気ままな感じで歩きながら、壁を斜めに滑つて消えた。ものの二、三秒だった。建物の近くを歩いてた男の姿が、車のライトに照らされて壁に投じられたとしか考えられない。横断歩道か車道を横切っていた男の背後に車が迫つて、その姿をライトの中心に捉えたのだろうか。あるいは普段そんな影が映らないところを見ると、車がふいに妙な風に向きを変えて、その近くを歩いてた男から影をさらつていったのだろうか。しかし建物の脇を走る道路をベランダから見渡してみても、歩いている人影はなく、車のライトはどれも地を低く掃いて走つてゐる。

とにかく壁に映つた男はレインコートを無造作に着流して、じつに気ままそうに歩いていた。酔っぱらつて一人で夜道を帰るところだなと私は想像した。祝い酒だか、ヤケ酒だか、うまくもない仕事の酒だか知らないけれど、ここまで来れば、酔いはもう自分一人の酔いであり、誰に気がねをする必要もなく、酒を呑んだ理由さえもう遠くなつてしまつて、一步ごとにあらためてほのぼのとまわつてくる。何もかも俺の知つたことじゃない。いま家に向かつているのも、明日の勤めのためにこの躰をとにかく家まで運びこんでおくためだ。毎日の暮しには、いまはそれだけの義理立てをしておけば沢山だ……。

発散しない酔いにつつまれてベランダに立っている我身に引き比べて、私は男の今の状態をうらやましく思った。どちらからどちらへ歩いて行つたのかは知らないが、その後姿を見送るような気持で、私は影の消えた壁を眺めていた。

しかしあんな風に一人気ままに歩いている時でも、自分の姿がどこかに大きく映し出されて、見も知らぬ誰かに見つめられているということがあるものだ。本人は何も知らずに通り過ぎてしまう。影が一人勝手に歩き出して、どこかの誰かと交渉をもつというのはまさにこの事だ。そんな事を私は考えた。

というのも、ほんの一瞬ではあるが、私は壁に投げられた影を自分自身の影と思ったのだ。そして影が投げやりな足どりで壁を斜めに滑り出した時、自分が歩み去っていくような⁽⁴⁾奇妙な解放感さえかすかに覚えたものだった。夜道を一人気ままに歩く男の、その影が本人の知らぬ間に壁に大映しになって、赤の他人の私の目を惹きつけて歩み去る。私はその影につかのま自分自身の姿を認めて、自分自身が気ままに歩み去っていくのを見送る。われわれには⁽⁵⁾影の部分の暮しがあるのかもしれない。あるいは、われわれの中には、影に感応する部分があるのかもしれない。

(古井由吉「影」より。一部省略)

注(*)

カタルシス⇨感情が解放され浄化されること。

問一 傍線部(1)における「戸惑い」とはどういうことか、説明せよ。

問二 傍線部(2)はどういうことか、説明せよ。

問三 傍線部(3)はどういうことか、説明せよ。

問四 傍線部(4)の「奇妙な解放感」を「私」が感じたのはなぜか、説明せよ。

問五 傍線部(5)はどいうことか、説明せよ。

次の文を読んで、後の間に答えよ。(五〇点)

やまと歌は、あめつちいまだひらげざるより、そのことわりおのづからあり。人のしわざさだまりてのち、この道つひにあらはれたり。世をほめ時をそしる、雲風につけて心ざしをのぶ。喜びにあひ憂へにむかふ、花鳥をもてあそびて思ひをうごかす。ことばかすかにしてむねふかし、まことに人の心をただしつべし。下ををしへ上をいさむ、すなはちまつりごとの本となる。

しかるを、⁽¹⁾世くだり道おとろへゆきしより、いたづらに色を好むなかだちとなりて、⁽²⁾国ををさむるわざをしらず。いはむやまた近き世となりて、⁽³⁾四方のことわざすたれ、まこと少なくいつはり多くなりければ、ひとへにかざれる姿、たくみなる心ばせをむねとして、いにしへの風は残らず。あるいはふるきことばをぬすみ、いつはれるさまをつくるひなして、さらにそのもとにまどふ。また心を先とすとのみしりて、ひなびたる姿、^{*}だみたることの葉にておもひえたる心ばかりをいひあらはす。ただしき心、すなほなることばはいにしへの道なり、まことにこれをとるべしといへども、ことわりにまよひてしひてまなば、すなはちいやしき姿となりなむ。艶なる体、たくみなる心、優ならざるにあらず、もし本意をわすれてみだりに好まば、この道ひとへにすたれぬべし。かれもこれもたがひにまよひて、いにしへの道にはあらず。あるいは⁽³⁾姿たかからむとすればその心たらず、ことばこまやかなればそのさまいやし。艶なるはたはれすぎ、強きはなつかしからず。すべてこれをいふに、そのことわりしげき、この葉にて述べつくしがたし。むねをえてみづからさとりなむ。

〔風雅和歌集〕仮名序より

注(*)

だみたる || 訛^{なま}った。

たはれすぎ || 軟弱となりすぎ。

問一 傍線部(1)～(3)を、ことばを補いつつ現代語訳せよ。

問二 波線部について、何が、どのようにして、「まつりごとの本となる」のか説明せよ。

問三 『風雅和歌集』には右の仮名序の他に漢文で書かれた真名序があり、内容がおおむね対応している。その真名序の一節に、「窃古語、仮艶詞、修飾而成之、還暗乎大本」とあるが、これはどういう意味か。仮名序の対応する箇所を参考にして説明せよ。

問題は、このページで終わりである。